

大学生における性役割認知の変化

守 秀子

The Transition of Gender Role Cognition in Japanese University Students

MORI, Hideko

キーワード：性役割認知、性役割意識、大学生、青年期

1. はじめに

ジェンダー研究は、アメリカを中心とした世界的な女性解放運動の流れを受けて、わが国でも 1970 年頃から女性研究者を中心に盛んに行われるようになった。さらに、1986 年の男女雇用機会均等法施行、2000 年の男女共同参画基本法施行、2003 年の少子化社会対策基本法施行などを受け、ジェンダーフリーな社会の実現にむけて、様々な視点から行われてきている。

ジェンダー心理学の領域において、わが国でその牽引者となったのは柏木恵子である。柏木は、性役割の識別に有効な 3 つの因子を見だし、それぞれに「行動力」「知性」「美と従順」と命名した(柏木, 1967, 1972)。「行動力」「知性」は男性役割に関する次元であり、「美と従順」は女性役割に関する次元である。そして、青年期になると、男子はこの認知パターン(男性には「行動力」「知性」が重要であり、女性には「美と従順」が重要であると考え)を受け入れているが、女子は男性に対して「行動力」「知性」を期待するものの、自身の役割特性として「美と従順」を認めることに消極的になることを明らかにした。続けて柏木(1974)は、青年期には、男子が全ての因子において女子より有意にその望ましさ

に差をつけ、男女の役割を対照的に分化させているのに対し、女子は男女の役割を二分化させるのではなく、女性役割とされているものを受け入れるのには消極的で、女性にも男性役割とされているものを求めていることを確かめた。さらに、青年が社会一般における性役割期待をどのようにとらえているかの認識についても調べ、男子は社会からの期待と自らの認識が矛盾しないが、女子はその認識のズレから葛藤を生じさせていると述べた。

また、国外では Bem(1974)が、男性性・女性性を独立した二次元的なものとしてとらえ、両性の特性を同等に併せ持つアンドロジニータイプが、社会的適応にすぐれるとした。これに追従した研究が、この後各国で盛んに行われるようになった。

伊藤(1978)もこれと同質の研究を行い、男性性・女性性という二次元に、人間性(Humanity)という次元を加えて検討し、これが両性に共通して強く望まれていることを示した。同時に「男性役割の方が女性役割より高く評価される事」および、「男性役割期待は社会的望ましさとは一致するが、女性役割期待とは一致しない、あるいはそれとは独立した形で期待が存在する事」を報告した。そしてその結果、発達過程において、男子は男性役割の獲得と同時に

自動的に社会的望ましき（人間性）も身につける事ができるが、女子は社会的望ましき（人間性）を身につける事を指向しているにもかかわらず、周囲の期待がそれとは異なっているために、その矛盾から葛藤を生じさせていると述べ、柏木と同様の見解を示した。21世紀に入り、後藤・廣岡（2003）が伊藤の研究の追試をおこなったところ、「女性役割が社会的に望ましいものへと変化し、女性の葛藤は減る傾向にあるものの、依然として続いているということ」、「男性役割期待は強固なステレオタイプが保たれていること」が示された。

2. 問題と目的

前述の研究を含め、多くの性役割研究は、女性がその役割期待から自尊心の面などで不利な影響を受けることを示してきた。そして、優位な立場にいる男性は、伝統的性役割観をより強く持っている事も明らかにされてきた。発達過程においても、女子は社会から望まれる「女らしさ」という枠に縛られて、自身の望む方向とは異なる役割を身につけていかなければならないのに対し、男子は社会から望まれる「男らしさ」を葛藤することなく受けいれていると考えられてきた。

しかしながら、男子が男らしくなることを目指して成長する事にも、女子とは違った意味で心理的負担がかかるのではないだろうか。男子はより強く頼りがいがあり、優秀で指導力がある事を期待され、自身もそれを望ましい事として成長していく。これは、多くの男子にとって、相当な尽力を強いられる事であろう。そのプレッシャーに苦悩する際にも、弱音を吐く事は男らしくないとされるために、弱みを見せずに強くたくましくふるまわなくてはならない。このような状況を考えると、女性のみならず、男性もその伝統的性役割観に抵抗を覚えることがあっても不思議ではない。また、共働き家庭が増加し

てきた現在、男性も従来女性の役割とされてきた家事・育児・介護などを担当する事が、女性側からだけでなく社会からの要請ともなりつつあり、男性が女性的役割をする事に対する抵抗感も、弱まる方向にあることが予想できる。柴山・新井（2004）により、「男子青年は理想自己として、男性性のみならず、女性性も今以上に身につけたいと思っているが、男はこうあるべきだという世間からの圧力があり、そのギャップから葛藤を生じさせ、自尊心を低下させている可能性がある」という報告もなされた。

そんな中、2008年頃から、各種メディアを通して、「草食(系)男子」という言葉がとりあげられる機会が増えてきた。これには学術的な定義はなく、学術的研究も見当たらない。また、解釈にもばらつきや混乱があるように見受けられる。しかしながら、これが伝統的な男性役割観とは逆方向のふるまいをする若い男性たちを指していることに間違いはないだろう。2006年にこの言葉を生み出した深澤も、「草食男子は上の世代の“男らしさ”に違和感を持つ若い男性の、多様化した生き方のひとつである」としている（深澤, 2009）。実態はともかくとして、このような用語が流行する事だけをみても、時代背景の追い風を受けて、男性も伝統的な性役割観に逆らう傾向を見せ始めたと言えるのではないだろうか。そして男性役割に関しては男性と同様に男らしさを求めている女性も、そのことを認めつつあるのではないだろうか。

そこで、本研究では、近年の性役割意識が前世代からどのように変化したかを調べることを目的とし、柏木（1972）が男女の性役割と関連する特性として見いだした項目を用いて調査を行う。なお、守は20年前の1989年にも今回と同一の調査を、同一大学同一学部の男女学生に行っている。20年の時を経てそれがどのように変化したかもあわせて検討したいが、20年前の調査は未発表のものであり個々のデータ

は失われ、その記録は平均値のみしか残されていない。そのため、今回の調査との比較において統計的な検証は不可能であり、数値から傾向をとらえる事に留まらざるを得ない。

3. 方法

1) 調査時期

2009年7月

2) 調査対象

・S大学教育学部男女学生 男子20名、女子22名

3) 調査方法

講義内の時間を使って、一斉に行われた。調査時間は教示も含めて10分程度であった。

4) 調査内容

柏木が、男女の性役割識別に有効であるとして抽出した29項目中から、調査を簡略化するために16項目を選び、各項目の望ましさを、男性と女性それぞれにとって「最も望ましい」から「最も望ましくない」までの7段階で評定させた。学生が回答を済ませた後、回収前に回答用紙に自分の性別を記すように指示をした。項目は下記のとおりである。

- (1)頭が良い
- (2)理性的
- (3)線の太い
- (4)かわいい
- (5)指導力のある
- (6)気持ちの細やかな
- (7)背が高い
- (8)仕事に専心的
- (9)従順な
- (10)依存的

- (11)容貌の美しい
- (12)積極的
- (13)経済力のある
- (14)意志強固な
- (15)活発な
- (16)視野の広い

質問項目は以下のように分類される。

○男性次元（男性役割として認知される次元）

- ・行動力の因子：積極的 経済力のある 意志強固な 活発な 視野の広い
- ・知性の因子：頭が良い 理性的 線の太い 指導力のある 背が高い 仕事に専心的

○女性次元（女性役割として認知される次元）

- ・美と従順の因子：かわいい 気持ちの細やかな 従順な 依存的 容貌の美しい

なお、「依存的」という項目に関しては、柏木の研究では、男性役割においては「女性をリードする」女性役割においては「男性に依存する」となっていたものを置き換えているので、多少ニュアンスが異なると考えられる。

4. 結果

評定の平均値を、表1および図1、図2に示す。

評定値は、最も望ましい=3、非情に望ましい=2、わりと望ましい=1、どちらとも言えない=0、わりと望ましくない=-1、非情に望ましくない=-2、最も望ましくない=-3と置きかえたものである。

表およびグラフの、上から5項目（視野の広い、活発な、経済力のある、積極的、意志強固な）が男性次元とされる行動力の因子、続く6項目（仕事に専心的、指導力のある、頭が良い、理性的、線の太い、背が高い）も同じく男性次元とされる知性の因子、最後の5項目（容貌の美しい、気持ちの細やかな、従順な、かわいい、依存的）は女性次元とされ

表1 2009年 項目ごとの評定値(平均値)

		男性役割意識 (男子学生)	男性役割意識 (女子学生)	女性役割意識 (男子学生)	女性役割意識 (女子学生)	
男性次元	行動力	視野の広い	2.05	2.36	1.95	2.23
		活発な	1.50	1.77	1.35	1.50
		経済力のある	1.30	1.82	0.80	1.00
		積極的	1.20	1.36	1.05	0.68
		意志強固な	1.10	0.82	0.40	0.64
女性次元	知性	仕事に専心的	1.40	1.77	0.90	1.32
		指導力のある	1.35	1.32	0.95	0.82
		頭が良い	1.30	1.64	1.10	1.36
		理性的	1.30	1.50	1.40	1.41
		線の太い	1.00	0.77	-0.20	-0.36
		背が高い	1.00	1.18	-0.10	-0.18
女性次元	美と従順	容貌の美しい	1.00	0.64	1.75	1.14
		気持の細やかな	0.75	0.64	1.40	1.68
		従順な	0.00	0.32	0.45	0.18
		かわいい	-0.50	0.50	2.05	1.55
		依存的	-0.65	-1.05	-0.50	-0.77

表2 2009年 因子別評定値(平均値)

	男性役割意識 (男子学生)	男性役割意識 (女子学生)	女性役割意識 (男子学生)	女性役割意識 (女子学生)
行動力	1.43	1.63	1.11	1.21
知性	1.23	1.36	0.68	0.73
美と従順	0.12	0.21	1.03	0.76

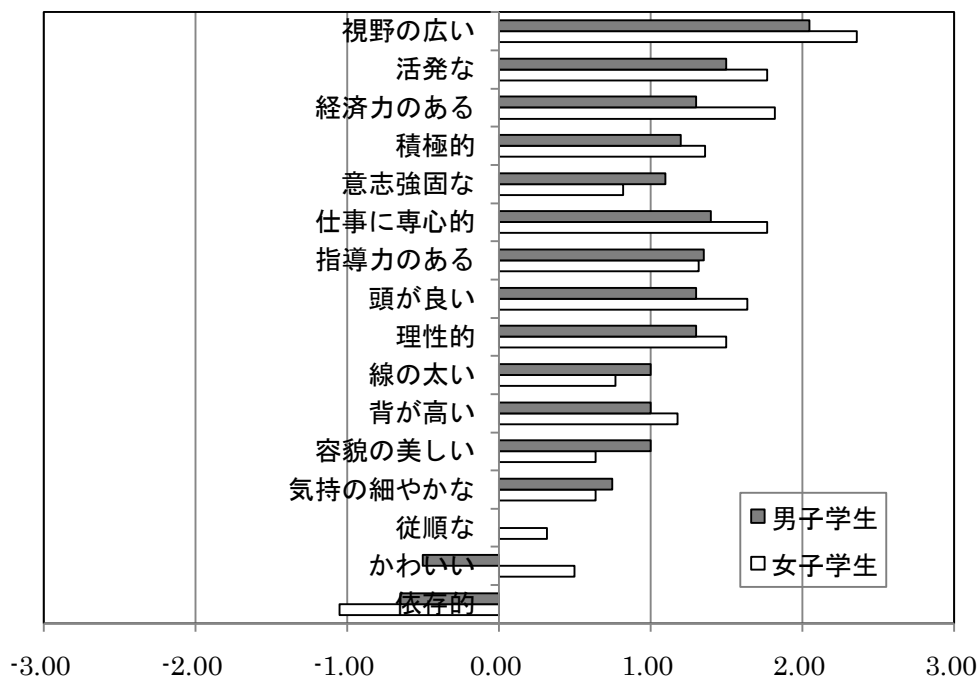


図1 2009年 男性役割意識

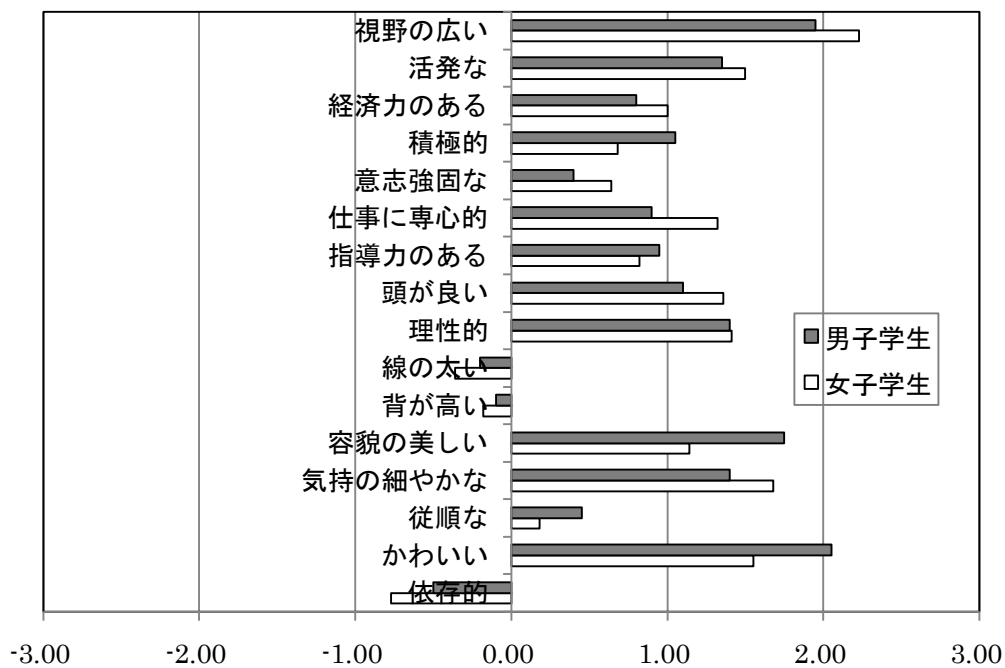


図2 2009年 女性役割意識

る美と従順の因子である。

まず、項目ごとに、被験者の性と性役割意識を要因とする 2×2 の分散分析をおこなった。以下にその結果について述べる。

1) 性役割意識間の差

同一被験者が、同一項目に対して行った男性役割意識（男性にとっての望ましさ）と女性役割意識（女性にとっての望ましさ）の評定値の差は表3のようになった。

表3 性役割意識における差 (F値のみ)

視野の広い	F = 0.95	ns	
活発な	F = 2.59	ns	
経済力のある	F = 27.71	**	(男性>女性)
積極的	F = 10.61	**	(男性>女性)
意志強固な	F = 9.73	**	(男性>女性)
仕事に専心的	F = 12.54	**	(男性>女性)
指導力のある	F = 5.82	*	(男性>女性)
頭が良い	F = 6.90	*	(男性>女性)
理性的	F = 0.00	ns	
線の太い	F = 31.86	**	(男性>女性)
背が高い	F = 46.91	**	(男性>女性)
容貌の美しい	F = 24.03	**	(男性<女性)
気持の細やかな	F = 38.24	**	(男性<女性)
従順な	F = 0.66	ns	
かわいい	F = 87.51	**	(男性<女性)
依存的	F = 3.66	+	(男性<女性)

+p < 0.10 *p < 0.05 **p < 0.01

表3からわかるように、「経済力のある」「積極的」「意志強固な」「仕事に専心的」「線の太い」「背が高い」の6項目は1%水準で、「指導力のある」「頭が良い」の2項目は5%水準で男性役割としての方が女性役割としてより有意に強く望まれている。また、「容貌の美しい」「気持の細やかな」「かわいい」の3項目は1%水準で女性役割としての方が男性役割としてより有意に強く望まれている。「依存的」は女性役割の方が男性役割としてより望まれているが有意傾向にとどまった。「視野の広い」「活発な」「理性的」「従順な」の4項目では、有意差がみられなかった。1970年前後に柏木の一連の研究で顕著な男女性役割識別項目とされていた16項目のうち、4項目においてその差が消失したが、依然として多くの項目が識別に有効であることが示された。

2) 被験者性差による性役割意識の差

男女被験者間における性役割意識の評定値については、いずれの項目でも有意差がみられなかった。しかし、以下の3項目については交互作用がみられたためさらに検定を加えた。

まず「積極的」という項目では、女子学生はこれを男性役割>女性役割としてその望ましさに有意な差をつけており (F = 14.26, p < 0.01)、男子学生はさほど差をつけていない (F = 0.69 ns)。そのため、この項目における両者の性役割識別の度合いには有意差がみられた (F = 4.34, p < 0.05)。

また、「意志強固な」という項目では、男子学生はこれを男性役割>女性役割としてその望ましさに有意な差をつけている (F = 12.27, p < 0.01) が、女子はあまり差をつけていない (F = 0.82 ns)。そのため、この項目における両者の性役割識別の度合いには有意傾向の差がみられた (F = 3.36, +p < 0.10)。

「かわいい」という項目では、男性役割の認知において性差間でかなり評定に差があり (F = 9.01, p

＜0.01）、女子学生の方が男子学生よりこれを男性にとって望ましい方向に考えている。また男子学生はこの項目の役割意識にたいへん大きな差をつけて男性役割＜女性役割としている（ $F=88.03$, $p<0.01$ ）。女子学生も同様に男性役割＜女性役割として有意に差をつけて評定している（ $F=14.08$, $p<0.01$ ）ものの、男子学生の差のつけ方の方が有意に顕著である（ $F=15.32$, $p<0.01$ ）。

以上のように、被験者の性差間で有意に性役割意識に差がついたのはわずか3項目であり、しかもそれは男女どちらの学生に偏ったものではなかった。柏木をはじめとして多くの先行研究でみられた「男子の方が女子より性役割を分化させる。すなわち男子の方が伝統的性役割観を強く持っている」という傾向は、ここではみられなかった。

3) 因子ごとの差

結果をさらに3因子ごとにまとめて平均値を出し、それぞれの役割について、男女学生がどのように評定しているかを示したのが、表2および図3である。

被験者の性と、因子、性役割意識の3要因で $2\times 3\times 2$ の分散分析をおこなったところ、こちらでも被験者性別間では有意差がみられず、3つの因子間および因子×性役割意識、因子×性別において有意差が見られた（順番に $F=42.97$, $p<0.01$ ； $F=73.44$, $p<0.01$ ； $F=4.23$, $p<0.05$ ）。

「行動力」「知性」の因子では男性役割としての方が女性役割より有意に大きく望まれており（それぞれ $F=26.85$, $p<0.01$ ； $F=59.53$, $p<0.01$ ）、「美と従順」の因子では女性役割としての方が男性役割より有意に大きく望まれていた（ $F=59.03$, $p<0.01$ ）。やはり、男性次元と女性次元は、はっきりとその役割期待として識別されている様子がみられた。

また、男女各々の性役割意識でみられた3つの因子間の差は、男性役割においても女性役割において

も有意なものであった（それぞれ $F=101.00$, $p<0.01$ ； $F=8.81$, $p<0.01$ ）。男性役割においては、「行動力」＞「知性」＞「美と従順」という順でいずれも5%水準の有意差がみられた。女性役割においては「行動力」＞「美と従順」＝「知性」という風に、行動力の因子だけが他の2つの因子より有意（5%水準）に大きく望まれており、女性次元より男性次元の「行動力」の方が上回る結果となった。もともと、ここでは性別との間で交互作用がみられたため、さらに検定を加えたところ、この差は女子学生自身の評定によるところが大きいことがわかった。女子学生は女性の望ましさとして「行動力」を他の2つより有意に高く評定しており（5%水準）、これは先行研究で報告されてきた「女子は女性役割の受け入れに消極的であり、自らの役割に男性次元を望む」というものと同様の結果である。一方男子学生は、女性にとっての望ましさにおいて「行動力」と「美と従順」の間に有意な差をつけておらず、この2つより「知性」を有意に低く評定している（5%水準）。男子学生がこれまで女性に強く求めて来た「美と従順」と、あまり求めていなかった「行動力」の差はなくなったことになり、これは先行研究とは異なる様相を示すものである。

4) 結果のまとめ

以上から結果を要約すると次のようなことがいえる。

①柏木が1970年前後に男女の性役割識別次元として抽出した因子は、依然としてその役割識別に強い力を持っている。しかしながら、項目別で見ると、16項目中4項目で有意差がみられなくなった。

②男子学生と女子学生の間で、性役割意識における差はほとんど見られない。先行研究でみられた「男子の方がより強く男性次元と女性次元を分化させる」という傾向はみられなくなった。

③男性役割意識においては、男性次元の方が女性次元より明らかに強く望まれていたが、女性役割意識においては、女性次元の方が望まれるということとはなくなった。

5. 考察

先行研究から、男性次元とされる役割には、社会的望ましき（人間性）と一致するものが多く、高い評価が与えられていることが確かめられている（伊藤, 1978; 伊藤・秋津, 1983; 後藤・廣岡, 2003）。すなわち、男性次元とされる役割は、「男性にとって」とか「女性にとって」という以前に、「人として」望ましいとされる項目が多いのである。それに対して女性次元とされる役割には、あまり価値がおかれていない。確かに、「従順」「依存的」などが人として望ましいこととは思われないし、「容貌の美しい」「かわいい」などは、人間性というよりは外見に関わるものである。このことから、男子はすんなりと己の役割期待を受け入れるが、女子はその役割を受け入れる際に葛藤があるとされてきた。

本研究では、前世代のこのような状況が、世相の変化に伴ってどのような変化を見せたかについて検証してきた。近年の研究では、男女性役割意識の差が縮まりつつあることが報告されているが（児玉ら 2003; 向井, 2007）、40年近く前に性役割識別の因子として見いだされたものが、未だに有効であることが確かめられた。

一方、女性役割意識においては変化が見られたといえよう。もともと女子自身は女性次元である「美と従順」という役割を受け入れることに消極的であったが、男子は女性にこれを強く求め、男性次元とは明確に差をつけて「女性にとって望ましいもの」としていた。それが今回の調査では、男性次元である「行動力」との差がなくなり、男子も女性に男性役割とされるものを求めるようになってきたことが

うかがえる。「美と従順」はあいかわらず、男性よりは女性の方に強く期待されているので、確かに女性役割を示す因子ではあるが、女性にとっての望ましきでみた場合、相対的には、もはやこれが重要視はされていない。つまり、女性には「女らしさ」と同程度に「男らしさ」とされる役割が期待される時代になってきている。

男性役割意識においては、男性次元の方が女性次元より強く望まれており、伝統的性役割意識が続いていることがわかった。しかしながら、いくつかの項目で性役割意識の差が消失したこと、被験者性別間で評定値に差がなくなったことなどを考えると、男性役割においても、その伝統的性役割意識は弱まる傾向にあるのではないかと考えられる。

その傾向をみるために、ここで、守が20年前(1989年)に、今回と全く同様の調査を行った結果と今回の結果を比較し、その変化について検討を加えたい。残念ながら、1989年の調査は個々のデータが残されておらず、項目ごとの平均値しかわからない。従って、統計的な比較検証はできないが、当時の調査は被験者数が男女とも100人程度だったことから、この平均値は十分に大きな意味を持つと考えられる。また被験者は、今回の調査と同一の大学、同一の学部の学生である。

・1989年の調査結果

1989年の項目ごとの評定の平均値は表4のとおりである。さらに項目を3つの因子ごとにまとめてその平均値を表5および図4に示した。

1989年の調査結果では以下のことが言える。

男子学生は、「行動力」「知性」などの男性次元が、自身には重要であるが、女性にとってはそれほど重要ではないと考えていた。先にも述べたように、これらは「人として」の望ましきとも言えるものであるが、男子はこれを女性にはあまり望んでいないの

表4 1989年 項目ごとの評定値（平均値）

		男性役割意識 (男子学生)	男性役割意識 (女子学生)	女性役割意識 (男子学生)	女性役割意識 (女子学生)	
男性次元	行動力	視野の広い	2.25	2.60	1.30	1.80
		活発な	1.80	2.30	0.80	1.40
		経済力のある	1.80	2.25	0.35	0.60
		積極的	1.75	2.35	0.50	1.00
		意志強固な	1.60	1.35	-0.50	0.40
	知性	仕事に専心的	2.50	2.00	0.70	1.65
		指導力のある	2.20	2.40	-0.25	0.60
		頭が良い	1.75	1.52	1.25	0.75
		理性的	1.70	1.45	1.30	1.25
		線の太い	0.80	0.45	-0.70	-0.30
背が高い		0.75	1.65	-0.60	-0.45	
女性次元	美と従順	容貌の美しい	0.50	0.60	1.80	1.25
		気持の細やかな	0.40	0.60	1.80	2.40
		従順な	-0.20	-0.70	1.65	1.30
		かわいい	-0.75	-0.50	2.35	1.75
		依存的	-1.25	-1.80	0.80	-0.40

表5 1989年 因子別評定値（平均値）

	男性役割意識 (男子学生)	男性役割意識 (女子学生)	女性役割意識 (男子学生)	女性役割意識 (女子学生)
行動力	1.84	2.17	0.49	1.04
知性	1.62	1.58	0.28	0.58
美と従順	-0.26	-0.36	1.68	1.26

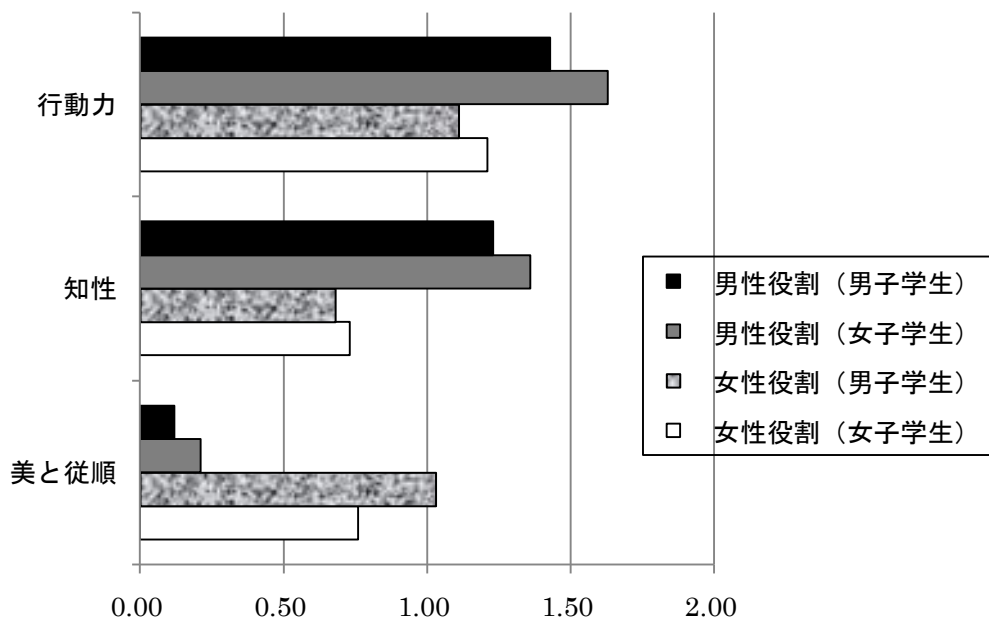


図3 2009年 因子別評定値

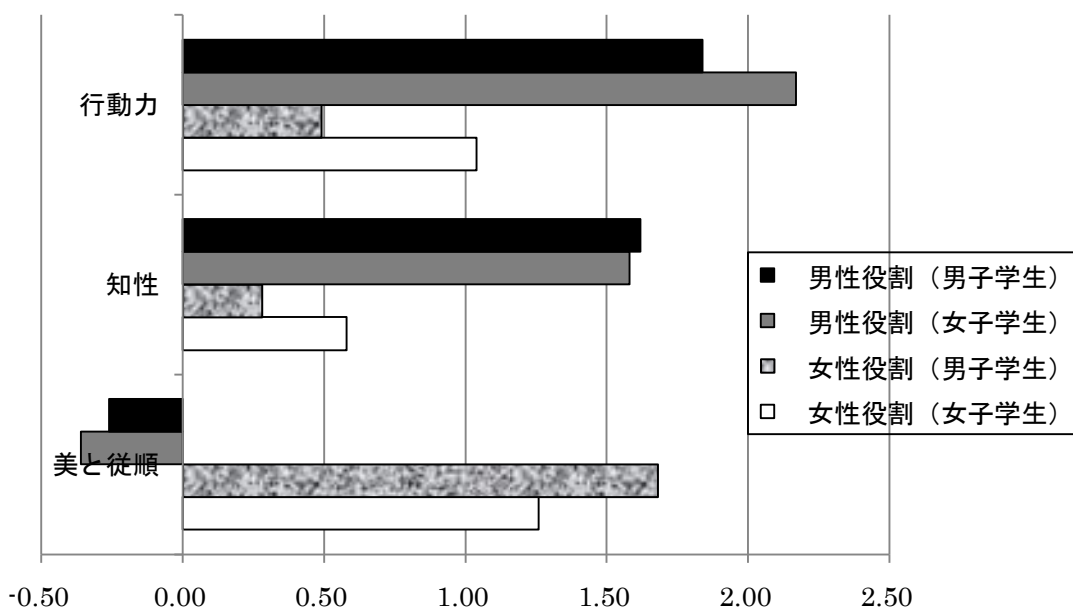


図4 1989年 因子別評定値

である。特に、「指導力のある」「意志強固な」は、評定の平均値がマイナス側（望ましくない側）にあることが注目される。また、当時の男子学生は女性次元の役割を自らには必要ないものとし、女性に対しては強く望んでいた。そしてここでも、社会的には望ましくないと思われる「依存的」という項目が、望ましい側に評定されていることが注目される。

女子学生は、男性に対して男性次元を強く期待し女性次元を望まないところは、男子学生と同様であるが、自らの役割に関しては、女性次元と同様に男性次元の「行動力」も期待している。

つまり、「男子は男女の役割を対照的に分化させているのに対し、女子は男女の役割を二分化させるのではなく、女性役割とされているものを受け入れるのには消極的で、女性にも男性役割とされているものを求めている」という柏木の報告と同一のことが確かめられたと言えよう。さらに、1989年には、仮にも教師を目指す教育学部の男子学生たちが、女性は指導力がなく、意志が軟弱で、依存的な方が良いと考える傾向があったことも付け加えておきたい。

・1989年と2009年の比較

1989年と2009年との変化を示したのが図5～図8である。図5および図6は男性役割意識における20年間での変化を男女学生ごとに示したものであり、図7および図8は、女性役割意識における20年間の変化を男女学生ごとに示したものである。

これらから、以下のことがみてとれる（統計的な検証ではない）。

①男性役割意識の変化

・男子学生における男性役割意識の変化（図5）

男性役割として認識されている「行動力」「知性」の両因子において、1989年より2009年の方が評定値が下がっており、男子学生は男性にとってのこの

次元における重要性を低く評価する方向に変化した。また、女性役割の次元とされる「美と従順」の因子では、1989年より2009年の方が評定値が高くなっており、男子学生は男性にとって女性役割が必要なものであるとみなす方向に変化した。すなわち、男子学生は男性の性役割について従来の性役割観を弱める方向に意識を変化させた。

・女子学生における男性役割意識の変化（図6）

男性役割として認識されている「行動力」「知性」の両因子において、1989年より2009年の方が評定値が下がっており、女子学生も、男性にとってのこの次元における重要性を低く評価する方向へ変化した。また、女性役割の次元とされる「美と従順」の因子では、1989年より2009年の方がその評定値が高くなっており、女子学生も男性にとって女性役割が必要であるとみなす方向に変化してきた。すなわち、女子学生も男性の性役割において、従来の性役割観を弱める方向に意識を変化させた。

②女性役割意識の変化

・男子学生における女性役割意識の変化（図7）

男性役割として認識されている「行動力」「知性」の両因子において、1989年より2009年の方が評定値が上がっており、男子学生は男性役割を女性にとっても重要なものとみなす方向に変化した。また、女性役割の次元とされる「美と従順」の因子では、1989年より2009年の方がその評定値が低くなっており、男子学生は、女性役割として女性に求めてきたこの次元の重要性を低く評価する方向に変化した。すなわち男子学生は、女性の性役割に関しても、従来の性役割観を弱める方向に意識を変化させた。

・女子学生における女性役割意識の変化（図8）

男性役割として認識されている「行動力」「知性」の両因子において、1989年より2009年の方が評定値が上がっており、女子学生も、男性役割を女性に

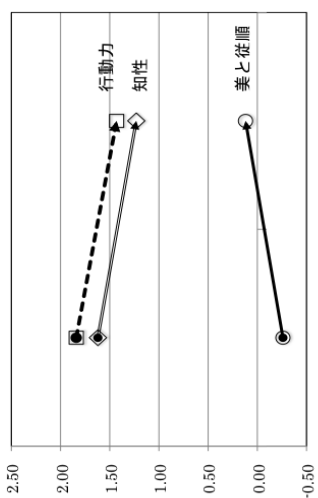


図5 男性役割意識の変化 (男子学生)

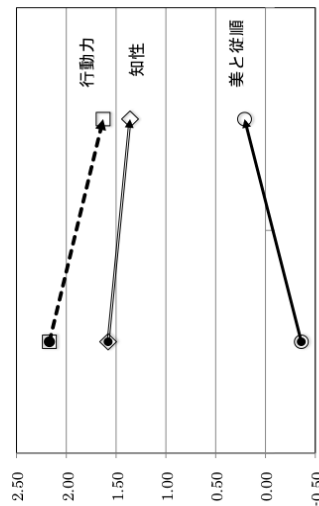


図6 男性役割意識の変化 (女子学生)

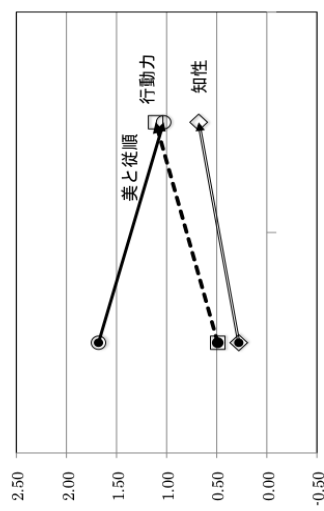


図7 女性役割意識の変化 (男子学生)

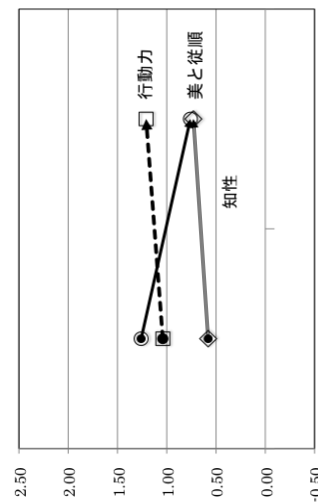


図8 女性役割意識の変化 (女子学生)

とっても重要なものとみなす方向に変化した。また、女性役割の次元とされる「美と従順」の因子では、1989年より2009年の方がその評定値が低くなっており、女子学生も女性役割とされているものに対して、その重要性を低く評価する方向に変化した。すなわち、女子学生も女性の性役割において、従来の性役割観をさらに弱める方向に意識を変化させた。

③20年間での変化に関するまとめ

図5～図8でわかるとおり、男女どちらの学生も20年の時を経て伝統的な性役割観を弱める方向に意識を変化させる傾向がみられた。すなわち「男性は“男らしくなく、女らしく”、女性は“男らしく、女らしくなく”」という方向に認識を変化させている。その結果、もともと次元間の差が少なかった女性役割意識は、次元間の差がみられなくなった（女らしさと同様に男らしさも求められるようになった）。また、男性役割意識は、依然として男性次元が女性次元より強く期待されているものの、その差は縮まる傾向にある。

以上の比較をふまえて、さらに考察を続ける。

現代の大学生の性役割意識は、上の世代と比べて、ひとことでいうと「中性化」に向かう傾向にあるといえよう。これは、役割期待を受け入れることに葛藤があった女子にとっては歓迎すべき流れであろうが、男子にとっても「男だからといってそんなにがんばらなくてもいいのだ」と、心理的負担が軽減される方向への流れとも言える。この流れが、急に止まることはないであろう。

わが国におけるジェンダー心理学研究の第一人者の一人である伊藤は、2000年にその著書で、「もはや、女性にとっては“家庭か仕事か”ではなく“家庭と仕事をいかに両立させるか”ということが問題になってきている」と述べている。それから10年を

経た現在、この傾向はさらに進み、女性たちは「女は家庭」という考えに縛りつけられることなく、キャリア志向で生きることが認められてきた。しかし、あいかわらず家事・育児・介護といった役割は、女性の肩にのしかかっている。女性が男性役割とされたものを行うことが認められてきているのにも関わらず、女性役割への負担は減っていないのである。また、逆に女性が家事・育児など女性役割に専心したいと望んでも、経済的理由や、キャリアを失う事への抵抗から、もはやそれが許されないという状況にもなっている。そういったことから、女性の葛藤は、前世代のそれとは質が異なるものになってきていると考えられる。

男性にとっても、一部の人を除いて、自分だけの収入で家族を養っていくことが困難な時代になってきている。妻にも社会でその力を発揮してもらいたいと望むばかりでなく、妻にも働いてもらわなくては家庭が維持できない状況になってきているのである。わが国ではそれをバックアップする体制が整っていないため、働く妻には大きな負担がかかり、当然、夫にも様々な形でしわ寄せが行く。子育て支援など各種の対策が急務であることは言うまでもないが、男女が協力し合う事なくしては家庭が成り立たないという現実があり、伝統的な性役割観に縛られていることは、もはや時代にそぐわないのである。これから社会人となり、また家庭を築こうとする青年男子たちは、幼い頃からこういった社会情勢を見ながら成長してきた。前世代とはその意識が変わってくるのは当然のことであろう。

この若い男性たちが将来社会人になった時、家庭を顧みる余裕がないほどのハードな仕事を求めるとは思われない。仕事を第一と考えて専心し、競争に勝って高い地位に就きたいと考える男性は、少数派になるのではないだろうか。たとえ収入は多くなくとも、定時には帰宅し、夫婦で仲良く家事を分担し、

子どもと接する時間を持つ様な生活を求める男性が増えていくことであろう。今後は、男性が伝統的な「男らしさ」に縛られ、そういった声を発信できないことの方が、問題になってくる事も予想される。そうなると、今度は「男性は自ら女性役割も指向しているにもかかわらず、世間からの期待がそれと異なる為に、葛藤を生じさせている」という研究報告が続く日が来るかも知れない。

数年後には、男性が堂々と育児休暇を申請し、「子どもが保育園で発熱したので迎えにいきます」と言える時代が来るかも知れない。男性も女性も、社会から強制された男らしさ、女らしさに縛られることなく、全ての人が「自分らしい」生き方を指向することができる時代が来ることを願う。

<引用文献>

- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42. 155-162
- 後藤純子・廣岡秀一 2003 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化 三重大学教育学部研究紀要 54, 教育科学 145-158
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146-151
- 伊藤裕子 2000 ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房

- 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 15, 193-202
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知Ⅱ 教育心理学研究, 20, 48-59
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知Ⅲ：女子青年を中心として 教育心理学研究, 22(4), 205-215
- 児玉真樹子・杉本明子・松田文子 2003 現代の男女大学生の性格特性と性役割認知 広島大学心理学研究 2, 73-84
- 柴山直・新井真由美 2004 青年期における性役割観と自尊心との関連：両親の養育態度への認識内容からの検討 新潟大学教育人間科学部紀要. 人文・社会科学編 7(1), 15-27, 2004-10
- 向井心一 2007 現代の青年期における性役割認知と過去の青年期における性役割認知の比較 臨床教育心理学研究, 33-1 45

<引用サイト>

- 深澤真紀 2009 『日経ビジネス オンライン』「草食男子の男らしさとは」

<付記>

本研究の調査実施にあたり、信州大学教育学部教授、川島一夫先生に多大なお骨折りをいただきました。川島教授と、調査にご協力くださった学生の皆様に感謝いたします。